

日本人の、日本人による、日本人のため にならない捏造：Ⅲ

開業して 10 年目。このシリーズは今年の初めごろから書くことに決めていた。これまでは、まあ当たり障りのない話題を中心に書いていたのだが、北朝鮮による拉致問題の進展、韓国による「歴史認識の見直し」の強制やありもしない従軍慰安婦の米国における銅像の建設ラッシュ、中国のでっち上げの「南京大虐殺記念館」を「歴史」に事実として記録しようという動き、などなど、朝日新聞やNHKなどマスメディアの報道があまりにも偏向し過ぎて目に余るようになり、彼ら自身もてあますような事態に陥っている。いったいこの国をどういう方向にもっていきたいのか！

さらには、来年で敗戦から 70 年が経過する。兵隊としての「生き証人」がほとんどいなくなってしまう可能性がでてきた。もう辛抱できない。

TVのコメンテーターとして出演していた男が、総理大臣の靖国神社参拝に触れて、「問題は、中国や韓国がどう反応するかでしょうね」などとしたり顔で話していたが、「おまえはどここの国の代表として話しているのか！」と思った。あきらかな「内政干渉」ではないか。(たとえば中国人に天安門とか民主化運動の弾圧などといえば必ず即座に帰ってくる言葉である。)

すると、雑誌「正論」の特集号で、「日本を貶めて満足か！朝日新聞へのレッドカード」がでていた。まだ読み終わっていませんが、決して便乗したものではありません。なぜなら、2009 年には、同じく「朝日新聞・NHKの大罪」特集号が発売されている。

高山正之さんが、ロサンゼルス特派員として赴任したとき、パーティに呼ばれた。米国側スタッフが近づいてきて、深刻そうな表情で「日本は昔、アジアの国々でたいそう悪いことをしたな」と言い出した。

いや別に、と否定すると、彼はかなりびっくりする。鳩が豆鉄砲を食らったような表情でこっちを見据えて「いや日本はひどいことをした。日本は朝鮮を植民地にしたではないか」

違うね、ともう一度否定する。朝鮮についていえば植民地 (colonize) じゃない。あれは併合 (annex) だった。米国がテキサスを手に入れるときの併合と同じだ。それに日本の統治はうまくいった。少なくともフィリピンを植民地支配した米国に何かいわれるほど非道なことはしていない。

彼は真っ赤になって言い返す。「米国はフィリピンを開化（civilize）させた。いいことをした。しかし日本は朝鮮で残酷なことしかなかったではないか」

お言葉ですが、と言い返す。米国はフィリピン人に独立させてやるからと騙して宗主国のスペインと戦わせた。スペインが降伏すると米国は約束を反故にしてフィリピンを米国の植民地にした。

怒ったフィリピン人が抵抗すると軍隊を出して彼らの虐殺を始めた。彼らの家族も捕まえて家に火をつけ拷問して殺した。

米西戦争は、4年間続いた。スペインは4ヵ月後に降伏しているのに、である。この4年間は、つまりフィリピン人の抵抗が鎮圧され、米国の植民地支配を認めるまで。この間、レイテ、サマルルの2つの島の島民を皆殺しにするなど「20万人のフィリピン人を殺した」と上院公聴会の記録に残っている。

朝鮮は違った。T. ルーズベルトが朝鮮はもはや国家の態をなしていないとはっきり発言して米公使館を閉じ、日本に任せている。日本は学校をつくり、電気を引き、工業を興して真の意味の civilization、つまりあなたのいう開化を行った。

そう説明すると、彼は「日本は朝鮮を植民地にしてひどいことをしたのは事実だ」と吼えて、「もうこの話はやめだ」。

日本をしたり顔でくさして、旗色が悪くなると怒り喚く。こちらも少々むかついたので、

「百歩譲って日本が朝鮮をフィリピン並みの植民地にしたとして、それでも日本が悪いというのは、もしかしてあなたは日本が植民地を持つことを許せないと思ったのか。植民地を持つのは白人国家の特権と思っているのか」

彼は、顔を真っ赤にして四文字の言葉を投げかけて、どこかに行ってしまった。

件の男とはのちに再会した。彼はあのあとフィリピンと朝鮮の歴史を調べてこちらの言い分が正しいのを知った、とあっさり非を認めてきた。

そしてこう付け足した。「初対面の日本人に朝鮮の植民地の話をすると、みんな申し訳ないという。そういう形で付き合いの主導権を取ってきた。反発されたのは今度が初めてだった」と。日本人には有効な「決め言葉だったのに」と笑っていた。

彼のいう「日本人」は新聞記者であり、総領事館のスタッフ、つまり各省庁からの役人であり、一流企業の駐在員など世論にコミットする世界の人々だったそうだ。そ

ういうあやふやな知識で微妙な国際問題をさもまともそうに記事にしている。

この米国人の「決め言葉」と同じものを支那の南京でも聞かされた。

日本軍が南京を落とした後、6週間にわたって市民30万人を殺した、つまり毎日7000人ずつ42日間、殺し続けたその証拠を留めるという「侵華日南京大屠殺遭難同胞記念館」を見に行ったときのことだ。

展示場はいかにもおどろおどろしくつくられているが、もともと虚構の事件だから物証などあるはずもない。だから展示品は「日本軍の虐殺の証拠写真」とかだが、(以下、検証すると、亜細亜大学の東中野修道氏が解き明かした写真ばかり、らしい。)

まともな実写は、「アサヒグラフ」に載った日本軍兵士らの写真で、もともとのキャプション「農家から鶏を買った笑顔の兵」というのが、「農家を略奪し農民を皆殺しにして家禽を略奪した日軍兵士」と変えてある。そう変えさせたのは江沢民だ。

当時の南京には市民は20万人もいなかった。日本軍が入城後は平静に戻り、道端で支那人の床屋に髭をあたってもらっている日本軍兵士の写真などが当時の朝日新聞にも載っている。

中国が主張する「虐殺」のそのさなかに報道班員としてやってきた作家の石川達三はもちろん、そんな虐殺を見てもいない。

その後に執筆した「武漢作戦」では、そのときの南京の風景をベースにしたこんな下りもある。

野口伍長が一等兵に声をかける。

「ちんばをひいているな。全快したのか」

「もう2~3日すれば全快します」

「今までどこの病院にいたのだ」

「南京にいました」

「南京は賑やかになっとるか」

「はあ、もうカフェでも何でもあります。ネオンサインがついております」

その南京でガイドについたのが中国共産党の下部機関、南京大屠殺研究会のメンバー載国偉で、彼はその目で見てきたように日本軍の「虐殺の模様」を日本語で語り続

ける。

話している彼もその荒唐無稽さに気づいているようで、その辺を指摘すると、彼は啞然とした顔つきでこちらを見た。

それは、あの米国人の表情と同じだった。

載は開き直る。「私はここを訪れた日本の立派なジャーナリストのガイドも務めました。みんな納得しています。疑う声はないのです。」

どんな連中かと聞くと「朝日新聞の本多勝一」に「筑紫哲也」に「久米宏」……
(註；小生、ここで思わず笑ってしまいました。)

「日本人の観光客にも話します。話をすると日本人はみな申し訳ないといひます。泣いて謝る人もいます」

米国人の言葉に見せる日本人の反応とこれもそっくりだ。

……つまり、向こうの言い分を検証も調査もしないであたかも真実のように流してきたことだ。

中国の話がでたので、**ハイラルの事件**についてまとめる。田辺敏雄氏の業績である。

ハイラルの「口封じ殺害事件」

ハイラルは、満洲のモンゴルに近いところにある、ノモンハン事件（1939.5）の前線基地である。（司馬遼太郎さんのモンゴル紀行の通訳だったツェベックマさんの生まれた土地）

1934年（昭和9年）に日本軍は対ソ戦に備えた5つの大規模な陣地構築に着手した。

1996年、「各地から連れて来られた中国人労働者を脅迫して、1934年春から軍事工事を行い、1944年完成した。……工事が終了した後、日本軍は中国人労働者を残酷にも全員殺害した。その被害地——敖包山西側の窪地に埋められた白骨の堆積があったので、これを万人坑と名付けた。……(訳文)」と書かれた碑文が建てられた。1998年にも碑が建ち、「苛酷な労働により死亡した者、または工事完成後、日本軍によって銃殺された者たちをハイラル河北岸の砂地に埋めたものである。……現在発見されている日本軍工事は一部分のみであり、全体の解明は今後の調査が待たれる。

(訳文)」と碑に刻み込まれている。また、明らかになった遺体は1万人、主工事完成は1937年末という。

将校としてハイラルに駐留した小杉峯彬は、戦後「ノモンハン会」から現地を訪れる度にこの地下陣地を訪れ、保全する人もなく草原の中に荒れ果てた姿を見ていただけに、碑が建ったと聞いて「ハイラル市が保全に乗り出してくれたか、と喜んだのも束の間」碑文を読んで愕然としたという。(中略)「明らかに虚構の歴史が目の前で作られ、私の心は暗く憤りに溢れている。」

これより前に作家の村上春樹が、中国人ガイドの説明を聞いて納得している。たとえば、「工人たちの首に針金を通してそこに連れて行って殺した」とあるが、首のどこに針金を通したのか、どうすればそんなことが可能なのか、私(田辺氏)は思い浮かべることができないし、なぜそうしたのか理由も思いつけなかった。村上は想像できるのか。

ソ連と満洲の国境地域に、ソ連側陣地が著しく進展しているとの偵察報告をうけた関東軍司令部は、1934年3月、陣地構築の着手を命じた。

ハイラルに居た3人に集まってもらい、その話を聞いた。

ひとは開口一番、「政府や外務省は中国に抗議をしないのか、あんないいかげんなことを書いて」と強い調子で話す。昨年(98年)、一般旅行者とハイラルを訪れたとき、30歳位の女性ガイドがとくとくと説明するのを聞いて、「何を言うか。俺はその時に居たんだ」と反論するとガイドは黙っていたという。

「・・・現地人は近隣の部落から割り当てて集めた約500名、それに関東軍から送られた苦力のうち約1000名を使った。宿舎を7~8棟建てて収容、鉄条網で囲むことはなかった。この中に「北支戦線の捕虜も含まれていたと思う。」食事は3食、日本兵と同量、週1回健康診断をする。「ビンタを喰らわすことはあったが、虐待するようなことはなかった。・・・150人位ずつ帰したのは間違いない。」

もうひとは「絶対に(口封じ殺害は)なかった。考えられない。」この人は警備に当たっていて、第3地区や2地区(万人坑の碑がある)の地下ケーブル埋設工事に立ち合うなどの経験から「作業員の殺戮等はデッチ上げの暴論」と主張する。他のひとは、「ウワサにも聞いたことがない。万人坑なんて何を言いだすのだろう」

水道工事の場合、「地下3メートル以下に水道管を入れますので、地表1.5メートル

ル位までを苦力（工人、労働者）で、それ以下の深い処は全力で隊員でやりました。理由は砂地故、深くなりますと死亡者がでます。側面のくずれる事が生じまして何回か掘り出した事があります。」事故死、病死はあったが、（降雪時期にも苦力部隊に赤痢が発生し、毎日死者がでた。陣地の一角に氷上雪上に遺体のあった棺を安置、番人つき）陣地構築に従事した苦力を一挙虐殺することは考えられない。あったとすれば噂がでる」。当時「噂もなかった」

以上のように、一緒に働いていた兵士が証言している。しかも、兵士らは、現地労働者のことを思いやり、深い所の掘削など危険な作業は自分たちでしている。

明らかな捏造です。・・・まあ、こんなばっかりやけど。それを朝日新聞は、一大スクープのように取り扱う。狂っているんじゃないか。

2014. 07. 01.